

附属図書館90年忘れ残りの記

法学部整理掛長 廣 庭 基 介

京大の図書館のように長い歴史をもった図書館になると、蔵書にしても、建物にしても、歴代の職員のことにしても、隅から隅まで分からない所は1箇所もなく、すべて白日のもととの如く分かっている、というような訳にはいかないものである。またそのような図書館に私のように何十年も勤めていると、館の正史に載らなかった歴史の残滓のような事項を自分でも知らぬ内に記憶の引出しに収めているものでもある。その引出しの中から一つ二つ、今の内に述べておくべきと思われることを紹介させて頂きたい。なお私の記録よりも詳細に御存知の方がおられたら、是非御教示頂くようお願いする。

1) もう一人の図書館長代理のこと。

京都大学が昭和54年から発行を始めた「京都大学歴代職員録」において、或いは、附属図書館が昭和36年に刊行して我が国最初の国立大学図書館史となった「京都大学附属図書館六十年史」においても、歴代館長の任免期日を見ると、本庄栄治郎第5代館長（昭和14. 1. 17～同17. 7. 28）と沢潟久孝第6代館長（昭和17. 9. 1～同22. 5. 31）の間に34日間の空白期間があることになっている。丁度同じ頃、司書官にも交替があって、昭和17年8月22日付けで竹林熊彦第7代司書官が辞任し、同日付けで長崎太郎が第8代司書官に就任している。上記の34日間の館長の空白期間に、昭和17年7月27日付けで、附属図書館長事務取扱を命じられた教授が実在している。それは、当時文学部長在任中であつた成瀬清（号：無極）教授であつた。9月10日には館長事務取扱の任を解かれているが、その成瀬が館長室で執務中にそこを訪問した富永牧太天理図書館長は、天理大学図書館研究室年報「芸亭」（ウンテイと読みゲイテイとは読まないことは図書館史を学んだ者には御馴染み）第12号（1972年夏）の巻頭随想「竹林先生のこと」の中で、次のように語っている。

「それが何の用件だったか記憶にないが、後にまた京大図書館をたずねていた。新館長は、縁のない畑から来られた人で、もちろん知らぬ人だが、一時、代理の椅子についているということであつた。話しているうちに、この人は遠い親戚にあたるものの知り合いということがわかり、意外に話はばたばたとくだけて行った。

『竹林さんはどうしましたか？』

単刀直入にたずねてみた。館長は苦笑をかくしきれずに

『ヤメましたよ……あの人の単刀直入は、京都人の館長には通用しませんヨネ』（後略）

この引用文の中で富永に「一時、代理の椅子についている……」と云つたのが前出の成瀬館長代理であつたことは間違いない。ただ、少々不可解なことは、富永の「新館長は縁のない畑から来た人で、もちろん知らぬ人だが」と説明している点である。何故ならば、富永は昭和3年に京大文学部（独文専攻）を卒業した人であるが、一方の成瀬は明治40年東京帝大文科大学（独文専攻）を出て、明治41年第三高等学校のドイツ語の教授となり、同時に京大文科大学でも独文の講師を嘱託され、大正8年には三高から文学部助教授に転じ、昭和5年文学博士となり、独文の教授に昇任した人だからである。富永が成瀬を知らなかったという事は、成瀬が小説家・随筆家としても既に大正時代から名を顕わしていただに一層信じられない気がする。尤も「縁のない畑」という言葉は、富永と縁のない畑という意味ではなく、成瀬（独文）と本庄前館長（日本経済史）の関係を云つたものか、富永が同じ独文出でも卒業後はキリシタン版等の書誌学研究者となつていたので、それと独文との関係を云つたものかも知れないが、それにしても、「知らぬ人……」というのが不思議である。

さて、富永は「一時、代理」の新館長に竹林司書官の現況を尋ねているのであり、館長は竹林が

辞任したと答えているのであるから、これは本庄館長が7月28日に辞任し、成瀬が館長事務取扱に任ぜられ、8月22日に竹林が辞任した後、9月1日から沢潟が新館長に補されるまでの8日間の或る日のことということになる。天理図書館長としての富永は、新村館長が羽田館長に交代した時以来、京大の図書館長が交代する度に表敬の挨拶に訪問するのを恒例としていた、とこの文章の前の方で述べている。

今、「京都大学歴代職員録」や、附属図書館自身が第3代目の新館屋竣工に際して作成したアートペーパー、カラー刷りのパンフレットなどに「歴代館長」の名前と任免月日が列記されているのを見ると、第9代田中周友館長（昭和32年7月15日～同38年7月14日）と第10代堀江保藏館長（昭和38年7月25日～同41年7月24日）の間の僅か11日間の空白期間に足利惇氏文学部長が館長事務取扱に任命されているのを見るが、それならば1カ月余も同じ職にあった成瀬文学部長も当然本庄、沢潟両館長の間にその名を記録されるべきだと思う次第である。又この際お願いしておきたいことは、「京都大学歴代職員録」に高等官であった歴代の司書官を記載して頂きたいということである。今では司書官という官職があったことを記憶する人も少なくなったが、司書官は明治41年の官制改革で設置されて、昭和22年に事務長制に代わるまでは、図書系職員のトップの職制として、京大では9人の人々が就任していたのである。

2) 京都大学における第一号司書は誰か？

京大の図書館は明治32年12月11日に開館し、即日利用を開始、同館はその日を開館記念日としている。一方、京都大学の開学はそれより2年半も遡る明治30年6月18日となっていることは周知の通りである。ところで、図書館が開館するためには、開館以前に相当数の図書を備え付け、一定数の館員も任用し、館の建築も終わっていなければならないことは当然のことである。京大附属図書館にもそのような開館前史があった。京大開設から僅か1カ月後の明治30年7月14日、まだ図書館の建物も館長も決まっていなかった時に、将来司

書となる予定ではあったが、座る席がないので、本部庶務課に勤務することを命じられた笹岡民次郎こそ第1号の図書館員である。今までこの人と、明治32年5月10日に着任した秋間玖琢の2人については、帝国図書館から呼び寄せられたように記述されたものがあったが、それは間違いで、この2人は京大に来る直前に帝国図書館に勤務していたのではなく、もっと以前に、帝国図書館が未だ東京図書館と呼ばれていた時代にそこの館員であった履歴をもっていたというのが真相である。

笹岡は、明治3年東京に生まれ、下谷小学を卒業したが、家の事情でもあったのか正規の中学校には学ばず、私塾や個人教師について英語を学んだ。個人教師の中には、後にプリンストン大学の教授となったヒントンという人や、夏目漱石の友人山川信次郎、東北大学金属研究所を創設し、文化勲章を受けた本多光太郎博士の実兄の本多浅次郎などがあり、正規の学校出ではなかったが、その語学力は相当なレベルであつたらしく、後のことになるが、明治38年に京大最初の「本学欧文一覧」を作製した際に、その編纂を担当した勉勵賞として60円の賞与を与えられている。さて、笹岡は明治22年、東京図書館に雇として最初の就職をし、同27年東京美術学校に配置換えされ、そこで文庫掛を創設している。同29年7月、仙台の第二高等学校へ出向を命じられ、同9月には書記（判任官）に昇格されたが、どういう訳が翌10月29日付けで免職となっている。そして約半年の後の明治30年7月14日付けで新たに京大へ書記として就職したのであった。

当時の京大は未だ理工科大学の開校に向けて鋭意準備中の段階であり、図書館の建物は勿論その敷地も決まっていなかったし、事務局の職員も総長以下全部で10人位いしかいない状態であった。そのような大学自体の草創期中で、笹岡は本下総長の命を受けて、全国の蔵書家・愛書家・著述家などに宛てて、将来一般市民に公開を計画している京大図書館の為に図書を寄贈するよう依頼状を作製する仕事を手始めに、「図書寄贈手続」、「寄贈図書受領書」、「京都帝国大学図書借受仮規則」などの立案にとりかかったのであった。以後昭和

11年9月までの39年間、主として洋書目録の専門家として勤務し、多くの司書を育て、京都大学附属図書館の目録の名を全国に知らせる基礎を築いた事績は記憶される必要がある。笹岡は又、書誌学者としても当時の幾つかの雑誌に論文を発表し、自ら稀覯書の蒐集に励み、時には図書館主催の展覧会に蔵書を出品したり、蒐集をめぐる新村館長と意見を戦わせたこともあった。新村は随筆の中で、笹岡を「竹世坊」と仇名して触れている。司書官にまでは昇り得なかったが、最後には高等

官の待遇に列して退職した。残念ながら、事務職員の職場における履歴の把握は、本人の在職中に限られており、笹岡についても退職後のことは一切わからない。住所も死亡時期も墓所も私は知る術を持っていない。笹岡の一の弟子であった文学部図書室主任の谷口寛一郎司書が生前私に、「笹岡さんの死後、その蔵書が河原町今出川上ルの古本屋竹山善書堂へ売りに出されたそうだよ、案に相違してよい本はなかったということだった」と話されたことがあるのみである。

京都大学図書目録作成の電算化にあたって

はじめに

本学が学術情報センター（National Center for Science Information System 以下、NCと略す）に図書の目録情報の登録を始めて足かけ4年が経過した。平成2年1月末現在、本学のNC登録データ数は、書誌約7万件、所蔵約11万件である。

ところで、昨年から今年にかけて、附属図書館の電算機のリプレイスが行われ、それにともない、ほぼ全ての部局に目録用端末が配置された。これにより、本学における目録作成の電算化がさらに前進することになる。目録作成の電算化が新しい段階を迎えようとしている今、改めて本学の目録体系について概観し、目録検索、目録作成の一助としたい。

I. 総合目録の現状

現在の目録作成の概要を図1に示した。

本学の目録作成は、現在、カードによる作成（手書きあるいはタイプ）と電算機を使ったオンライン目録作成の2方法により行われている。図からもわかるように、

- ① 受入れ図書のすべてをオンライン目録作成している部局
- ② 受入れ図書の一部をオンライン目録作成し、

それ以外は目録カードを作成している部局

- ③ 受入れ図書のすべてについて目録カードを作成している部局

と、部局により様々な状況にある。オンライン目録作成によりデータベース化された図書については、目録カードを全学総合目録（カード目録）に排列していないが、各部局で作成された目録カードは附属図書館に送付され、附属図書館が編集・加工し全学総合目録（カード目録）に排列している。従って、総合目録は、カード目録とオンライン目録（近畿北部地区国立大学目録データベース）により構成されていることになる。

II. オンライン目録

1. オンライン目録システムの概要

学内の図書館・室の目録用端末から附属図書館の電算機を経由してNCの目録システム（NAC S I S - C A T）^{*1}に接続して、目録情報の登録（以下入力と称す）をする。NCに入力されたデータは、一時的に附属図書館のデータファイルに取り込まれ、その日の夜、近畿北部地区国立大学目録データベース（以下、近畿北部地区目録データベースと略す）に登録され、翌日、検索可能となる。又、必要があれば、カード、図書の背ラベル、